

闘争本能失った国と個人を憂う

正論



拓殖大学学長
渡辺 利夫

いずれのエッセーだったか思いだせないが、会田雄次先生が書かれたある文章を記憶している。母親と子供が民家でともに焼け死んでしまうという事故が連続して発生したことがあった。どうしてこんなに痛ましいことがつづくのかと先生は嘆き、ある想像をしていた。ひょっとして、母親は火をみて立ちすくみ咄嗟の行動を取れないまま火に巻かれてしまったのではないか。手の届くところにある花瓶やら椅子やらを投げつけてガラス戸を打ち破り、子供を避難させてやれなかったものか。

学校でも地域社会でも他人と競い争うことなど悪であるかの如く教えられてきたため、危機から我が子を守る「闘争本能」が母親から失われてしまったのではないかと先生は述べておられた。

いじめにも抑止力で対抗
そういえば、少年時代のことが思い浮かぶ。第二次大戦時、山梨県の田府に生まれた私は米軍の空襲によって焼け出され、母の里の小学校で何年かを過ごした。田舎の小学校で私は異分子だったらしい

く、級友の「いじめ」の対象となった。弟を氣遣う長兄は、鋭く研いだ鑿を私の鞆にしほせて学校に通わせた。鑿を友に向けたことはなかったが、私がそれを隠しもっていることは皆にわかったらしい。以後、私に敵意をみせる者は誰もいなくなった。私に阿るような態度の者まであらわれた。

ままならぬ人の世に生まれ落ちた以上、人間は他人と協調すると同時に闘う気概をもたずして生をまっとうできない。当たり前のことだと私は思うのだが、なぜか現代の日本では協調のみが善しとされ、それがなければ生存が危ういはずの闘争本能を個人も国家もすっかり失ってしまったようだ。

個人と同様、国家にも生存への強い欲求がある。だからこそ、国家は他国と協調したり提携したり結託したり、はたまた欺いたり脅かしたり戦争に打って出たりもする。むしろ国家や民族は、個人よ

り一段と強くエゴイスティックな存在だといわねばならない。国家や民族が生存本能を没却しない以上、エノセントリズム(自民族中心主義)の克服など見果てぬ夢であらう。

自民族中心主義噴き出す時代
冷戦という「大戦争」が終焉するや、人々は原初の情念に衝き動かされて固有の人種集団、宗教集団、言語集団へと分化をつづけ、その過程で地域紛争と呼ばれる「小戦争」を飽かず繰り返してきた

憎悪の情念に囲まれた日本
モイシのいう通りだと思つ。反日感情を扇揚させ挑発的な行動に出なければ、自らの情念を抑えきれない国々に日本は周辺を固められていく。抗日をアイデンティティーとする中国共産党は「愛国主義」の旗を下ろして日本に向かうことはできない。韓国で「親日・反民族行爲真相糾明特別法」が超党派の共同提案で成立したのは、つい5年前のことである。憎悪の情念を日本にぶつけてこない北朝鮮は想像することさえ難しい。

メドベージェフ大統領とプーチン首相のロシア双頭体制が発しているメッセージは「1989年からこの方、お前たちはわれわれを厚かましくも見下してきた。だがそんな時代は終わった」というものだ、とモイシは解釈する。そうにちがいない。ならば、日本も隣を固めるべきだが、そんな気配はない。専守防衛やら非核三原則を繰り返すだけで身がもつとは思えないにもかかわらず、である。

我が政権は、普天間飛行場移設という国家安全保障の問題を求

ピュリズム(大衆迎合主義)の強い言葉で語って、唯一の同盟国との関係を手ひどく毀損してしまつた。それでも別段あわてていない様子はない。韓国併合百年に際しては、道義において自国がいかに劣っていたかを諷々と説いて自国の歴史を貶め、これをあたかも謙虚で率直で勇気のあることであるかのように粹がっている。

中国船舶に領海を侵犯され、これを拿捕したものの、船舶と船員は早々と帰国させ、逮捕・勾留した船長も結局は処分保留のまま釈放という屈辱を味わわれたのは、わずか3カ月前のことだ。北方4島は日本固有の領土だというのは口先だけ、ここにメドベージェフ大統領が来訪する蓋然性が高いという情報もあけられても、外交ルートを通じて訪問を阻止しようという気概などなかった。

国家の本質にかかわることが立つにつけに起こっているのだが、指導者たちはこれらをききして深刻なものとして受け取ってはいない。日本と日本人の闘争本能はもう毀れてしまったのか。

(わたなべ としお)